



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	N・ヴィシネフスキー著『オタス』（第2版）を論評する
Author(s)	井上, 紘一
Citation	北方人文研究, 8, 101-123
Issue Date	2015-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58452
Type	other
File Information	08_06_inoue.pdf



〈書 評〉

N・ヴィシネフスキー著『オタス』（第2版）を論評する

井上 紘一

評者は本書¹を「人類学的エスノグラフィー」として興味深く読んだ。人類学者は顕微鏡的微視、身の丈に合った熟視、そして天空からの鳥瞰も兼ね備えた視座に立たねばならぬと信ずるからである。サハリンの作家ニコライ・ヴィシネフスキーは、故郷の島の一隅にかつて実在した「オタス（の杜）」を象徴的トポスとして、これにかかわる時空を軽やかに飛翔するフィールドワークを展開しつつ、自らは「民族政治的オーチェルキ」と形容する異色のエスノグラフィーを創出している。

1. 本書の概要

第1部「ロシア帝国の残滓」（pp.11-67）では、本書の時間軸をなすヤクート（サハ）人ドミトリー・P・ヴィノクーロフ（Dmitrij Prokop'evič Vinokurov）²が20世紀の第1四半期中にかかわった出来事が、当時の国際情勢の文脈の中で広範に略述される。

1909年北サハリンに姿を現したヴィノクーロフは、やがて毛皮買付人やトナカイ飼育企業家として財をなし、1920年4月の日本軍による「北サハリン保障占領」後は同軍に協力してさらに蓄財を重ねる。25年5月には日本軍が撤退し、北サハリンにソヴィエト権力が樹立されて集団化が始まる。ヴィノクーロフは翌26年12月³、家族ならびに牧夫十名余と300頭のトナカイを率いて北緯50度線を越境し、日本領南樺太へ亡命することとなる。

第2部「亡命者」（pp.68-164）は、ロシア革命とそれに起因する内戦が生み出した「ロシア人亡命者」を表題に掲げるが、なかならずく東アジア——満洲を含む中国と、南樺太を含む日本——における亡命ロシア人の動向を縦横に論じて、本書では3分の1強の紙幅を占めている。

1926年12月に越境して南樺太最北の町敷香⁴（現ポロナイスク）に至ったヴィノクー

¹ ニコライ・V・ヴィシネフスキー著『オタス——民族政治的オーチェルキ』第2・増補改訂版、2013年、ユジノ・サハリンスク刊（Nikolaj Vasil'evič Višnevskij, *Otasu—Etnopolitičeskie očerki, izdanie vtoroe, dopolnennoe*, 283 str., so mnogimi illjustracijami, tiraž 500 ekz., Južno-Saxalinsk: GBUK «Saxalinskij oblastnoj krajevedčeskij muzej», 2013）。

² ヴィノクーロフは1884年、ヤクート地方のヤルモンカに生まれ、1942年4月20日、南樺太の「オタス」にて没した。享年58才。

³ 著者はJe・A・クレイノヴィチの伝聞情報を引いて、ヴィノクーロフの南樺太亡命を「1926年12月」と記している（本文 p.64）。庄司宏氏は1937年、これを「大正15（1926）年1月」と記載するも（庄司1937: 3）、その頃のヴィノクーロフはいまだ北サハリンに留まっていた。

⁴ 著者は「敷香」の読みに関して、本書（増補改訂版）では一貫して「シスカ」を選択しているが、1994年の初版では「シクカ」と記していた。1991年の秋にポロナイスクでヴィシネフスキー氏とお会いした折、まさにこの「読み」について訊ねられた私は、一般には「シスカ」だが、官用語では「シクカ」とも発音したようだ、とお答えしたことが懐かしく思い出される。

ロフは、敷香郊外のオタスと称する小島⁵に住みつき、「ソ連からの亡命者」としてトナカイ飼育業を再開する。同島には翌27年1月、樺太庁がアイヌ以外の原住民保護を謳う保留地（通称「オタスの杜」）を設置する⁶。ヴィノクーロフは観光名所となった「オタスの杜」の「酋長」として知名度を高めてゆく。彼は1930年3月、33年1月、34年8月と3度にわたって上京し、政官軍の要人たちと会見しているが、この頃が「亡命露人／ヤクート人愛国者／馴鹿王」ヴィノクーロフの絶頂期だった。1934年4月、豊原（現ユジノ・サハリンスク）の樺太日日新聞に発表された彼の「意見書」については後述する。

第3部「陰鬱に漂う黒雲...」（pp.165-213）。ここでの時間枠は第2部とほぼ重なりながら、ヴィノクーロフが亡くなる1942年までを包摂するが、そのテーマは日ソ国境に立ちこめる暗雲、即ち両国の対峙である。日本が引き起こした「柳条湖事件」（31年9月18日）、「満洲國」建国（32年）、国際連盟脱退（33年）⁷、ハルビンを拠点とする白系露人の「ファシスト運動」の跋扈については第2部ですでに言及されていたが、「盧溝橋事件」（37年7月7日）を契機に日中戦争が勃発すると、日本は「満洲國」、朝鮮、南樺太の3国境を介して、ソ連との抜きさしならぬ軍事的対峙、臨戦態勢に追い込まれた。

このような臨戦態勢下の南樺太で1938年11月、ヴィノクーロフは「ソ連のスパイ」容疑で拘束されて、豊原刑務所に1年半収監されるという事態が出来た。厳しい取調べの結果、彼は8月28～30日に北サハリンへ拉致されて、諜報活動に従事することを条件に南樺太へ帰され、また26年末の亡命時も同じ密命を帯びていたことまで供述したとされている（pp.204-5）⁸。40年初めに出獄したヴィノクーロフは、獄中で得た胃痛と頭痛に苛まれつづけたが、2年後の42年4月20日、失意のうちに58年の生涯を終えた。

第4部「オタス」（pp.214-260）⁹では、象徴的トポスとしての「オタス」が時空を超えて伸縮自在に変貌する諸相が例示される。例えば、冒頭で語られるウイルタとアイヌの「多来加合戦」はタライカ地方の草創期が舞台であるが、その後は概ね「オタスの杜」における原住民の生活が、聴書きにもとづいて再現されている。

後半部では1941年の日米開戦以降の南樺太情勢がほぼ編年的に跡付けられたあと、

⁵ この小島は現在、南隣の島「ユージヌイ」（「南の島」、旧称「左知」）に対して「セーヴェルヌイ」（「北の島」）と呼ばれているそうである（2011年8月、現地にて聴取）。

⁶ 庄司（1937: 3）、菊池（1997: 559）。樺太庁のこの措置は北米原住民の「保留地」に倣ったものであるが、北サハリンの同族者（ニヅフやウイルタ）に対する宣伝の意味もあったようだ。

⁷ 国際連盟からの脱退は日本帝国の命運を分けた分岐点、即ち、帝国政府の犯した最大の失策であった、と私は考えている。

⁸ 事件の全容を伝える邦文記録のタイトルとファイル情報は露訳で提示されているが（p.205）、所蔵機関名が欠落するから文書の特定は至難である。なお、被告人の数が初版では「8名」とあるのに、増補改訂版では「9名」と記載されるなど、不可解な点もある。このような重要文書は、正確なロシア語に翻訳された全文を引用すべきではなかろうか。

⁹ 1994年の初版本では第2部「オタス」の一部（初版 pp.119-54）を構成していた。

45年8月のソ連軍侵攻がもたらした敷香の、また実体としての「オタスの杜」の終焉で締めくくられる。末尾にはヴィノクーロフと身近にかかわった人たちの「その後」への言及があり¹⁰、彼の妻アナスタシヤは1959年、娘のヴァルヴァラ¹¹は1987年9月17日に没している。

第5部「サハリン—サハ、時における旅」(pp.261-277)は、ヴィシネフスキー氏による「サハ共和国(ヤクーチヤ)への旅」の記録である。360年前のカザーク軍団による征服、帝国のシベリア統治拠点としてのヤクーツクの発展、そしてこの町に滞在した日本人漂流民の話などは、むろん文献資料による「旅」の成果であるが、1992年11月には著者自身がヤクーチヤを訪問して(p.277)、ヴィノクーロフの足跡を尋ねる「旅」も実行している¹²。

後半部ではフィールドワークの成果として、ヴィノクーロフの今は亡き両親・兄弟に関する情報や、出会うことのできた甥たち——長兄ミハイルの子息ミハイル、次兄ニコライの子息イエゴル——からの聴書きが開陳されている。因みに1992年はヴィノクーロフ一族にとっての厄年、つまり1942年の50周年にあたる。42年4月、まず末弟のドミトリーが南樺太で出獄後に、次いで11月には次兄ニコライがヤクーツクの獄中で、それぞれ病死していたからである。「オタス」の射程はこのように、レナ川中流域のヤクーツク周辺にまで確実に及んでいたわけだ。

2. 初版と第2版の異同

まずは増補改訂版上梓までの経緯を、本書の記載(p.7)にもとづいて振り返っておこう。ヴィシネフスキー氏は1992年、本書の原型となる著述をポロナイスクの週刊紙*Zvezda*に寄稿したあと、翌93年には「商人ヴィノクーロフ」と題してヤクーツクの隔月刊誌*Poljarnaja zvezda*に発表している¹³。それに92年11月の「ヤクーチヤ訪問」の成果を加筆し、単行本としてユジノ・サハリンスクで出版されたのが初版本『オタス——民族・政治的オーチェルキ』(1994)である。そして2013年には第2版が上梓された。

¹⁰ 「その後」への言及は、初版本 第1部「馴鹿王」の該当箇所(初版 pp.102-6)からの転載であるが、大幅に加筆されている。

¹¹ 本書は、ヴァルヴァラ・ヴィノクーロヴァ(日本名・上野芳子)を男勝りで残酷な女と紹介するが、一面的に過ぎるであろう。別の一面を示すべく、彼女の肉声を伝える書簡2通を末尾に付録する(「資料2」)。

¹² ヴィシネフスキー氏によると、サハ共和国の作家・社会活動家B・スルベ(Bagdaryyn Sulbe、本名 Mixail Spiridonovič Ivanov)氏は、亡命愛国者ヴィノクーロフの復権活動の一環として1992年にサハリンを訪れ、両氏はそのとき初めて顔を合わせたという。著者の同年11月のサハ共和国訪問は、このときの出会いが契機であったろう。奇しくも同92年9月、私はスルベ氏とヤクーツクでお会いしているが、その折もやはり「ヤクート人たちが日本と緊密な関係を構築せぬためにも、ヤクーチヤは外洋への出口が切断された」(p.276)と語っておられた。作家からは、上梓されたばかりの御高著 *Olox Dolguna* (『運命の有為転変』、ヤクーツク1992)も頂戴した。同書の最終章(pp.131-175)ではヴィノクーロフ論が展開されている。

¹³ Literaturno- i obščestvenno-xudožestvennyj žurnal, 1993, №№ 2-3 所収。同誌での公開は、上記スルベ氏の支援で実現したという。なお、*Zvezda* 紙寄稿記事は参照できなかった。

したがって、この増補改訂版は21年の歴史を背後に抱えているわけである¹⁴。

なканずく初版と第2版の間には19年の歳月が流れている。その間のロシア社会では民主化や言論・出版の自由が進捗し、非公開だった古文書庫の多くが公開され、国外旅行も格段に自由化された。ヴィシネフスキー氏はこのような状況下で、新情報を国内外に求めて東奔西走され、その結果が増補改訂版として結実したものと思われる。そこで以下では、初版と第2版の異同を要約して箇条書きで記し、併せて若干のコメントも加えたい。

- 1) タイトルは *Etno-političeskie* の「ハイフン」が削除されただけであるが、紙型とページ数はほぼ倍増、したがって情報量は4倍弱と見積られる。但し、情報量の増加分は、大半のページに挿入された大量の写真や図版の追加で、その過半が消化されている。
- 2) 2部構成の初版に対し、第2版は5部からなる。初版の第1部が第2版では3分割(第1、3、5部)される傍らで、第2部は第4部へと移動している。そして第2版では最大の紙幅を擁する第2部「亡命者」が新規に挿入された。
- 3) ほとんどの「節」に推敲の形跡が認められるが、加筆の方が優勢となった「節」も少なくない。さらに各部には、19年の研鑽を忍ばせる加筆で構成された新設の「節」も見出される。新規導入節の比率は以下の通り——第1部(4/23)、第2部(20/40)、第3部(7/23)、第4部(3/28)、第5部(1/15)。加えて、第2版のために書き下ろされた「自序」のほかに、6件の「付録資料」¹⁵も新たに収録されている。
- 4) *Poljarnaja zvezda* 誌所載稿では皆無だった出典の記載が、初版では散発的に見られるようになるが、第2版ではとりわけ加筆部分において顕著に増加している。とはいえ、いまだ不十分の感は否めない¹⁶。
- 5) 最後に、初版本には付載されていた「参考文献書目」が、第2版に見出せないことはまことに遺憾である。

* * *

評者が冒頭で本増補改訂版を人類学的エスノグラフィーとして読んだと述べたわけは、以上で概ね了解いただけたであろう。当然ながら別の読み方もありうる。その鍵は

¹⁴ ヴィシネフスキー氏は初版の「自序」で、ヴィノクーロフの通訳を務めた梅宮富三郎の御子息「ウメミヤ・イワオ(梅宮巖)」氏との「2年前(1992年)」の出会いが、作家の背中を押したと記しているから(p.6、初版p.3)、その歴史はさらに遡るのかも知れない。私がポロナISKでお会いした91年の秋(脚注4参照)、ヴィシネフスキー氏はすでに構想を温めておられたのではなかろうか。

¹⁵ 1) 日露地名対照表、2) 1916–1941年における滞日ロシア人の人口と分布、3) 1941年の南樺太における非日本系人口、4) 北サハリン(アレクサンドロフスク地区)における弾圧と極東での軍事・政治事件の相関図、5) ヴィノクーロフ家の系図、6) サハリン州国家歴史文書館所蔵の「調書」と「訴追尋問調書」。

¹⁶ 例えば第1部の1節「最後の大会」(p.52)では、1925年2月に北サハリンで催された「最後の原住民大会」の様子が会話調で再現されている。その典拠は果たして、出席者の誰かからの聴書きであったのか、それとも文書記録に裏付けられた描写なのであろうか。

もしかすると、副題の *Etnopolitičeskie očerki* に見出されるのかも知れない。*etnopolitika* はひとまず「民族と政治の交わる地平」と解しておくとして、この際は V・Ja・カントロヴィチのひそみに倣って *očerki* に着目したい¹⁷。もしヴィシネフスキー氏がカントロヴィチと同じ見地に立たれるのならば、氏の立ち位置はそれなりに明快であって、「人類学者の視座」とも通底しているように拝察される。いずれにせよ、同氏が増補改訂版の上梓に漕ぎつけるまでの 21 年に及んだもろもろの研鑽に対しては、この場をお借りして敬意を表したい。

なお、日本では小山内道子氏が初版本を丁寧に訳出されて、タイトルと刊行年の異なる 2 書が上梓されている¹⁸。初版本の邦訳は、ヴィノクーロフを性懲りなく「馴鹿王」、「(二重) スパイ」など、紋切り型の決めつけで済ませてきた日本人の啓蒙に大いに裨益するであろう。しかしながら、一旦、増補改訂版が公刊された以上、第 2 版の可及的速やかなる邦訳刊行が囑望される。

論評

ヴィシネフスキー氏にとっては必ずしも本意でないかも知れぬが、本書はヴィノクーロフの伝記として読むことも可能である。評者は彼を「本書の時間軸をなす」人物と位置づけたが、見方次第では、日本とロシアの狭間で数奇な一生を送った「主人公」と捉えることもできる。しかしながら、著者はそのヴィノクーロフをめぐって、貪欲で残酷な商人、「オタスの杜」の支配者、熱烈なるサハ愛国者、ソ連諜報員、「ロシア・ファシスト党」のヤクート州「代表」など、他者による評価の羅列に終始しておられて、彼の内面に肉薄する統合的人物像の把握には成功していない。確かに、己の心情を吐露するような書き物を残さなかった故人の真情を付度することは、もとより至難の業に違いない。だがカントロヴィチは、まさにそのことを「オーチェルキスト」に求めていたのではなかったか。

1. 北方民族よりの意見書

ところで、ヴィノクーロフにもそのような「書き物」がなかったわけではない。評者の確信するところによれば、彼が 1934 年 4 月、樺太日日新聞の朝刊第 1 面に 5 回連載

¹⁷ 「オーチェルクは同時代の社会における『新しいもの』の探求を核心とする」、「読者は、著者が何に同意し、何に不同意かを見極める」とカントロヴィチは記し、オーチェルキストの真骨頂は「まっとうな言葉!」(«Spravedlivye slova!»)にありと看破している(Kuznecov 1971: 6-7)。にもかかわらず、カントロヴィチの『サハリン物語』では、ヴィノクーロフがソ連の国策に即して「人民の敵」と指図されているのは皮肉である。クズネツォフ論文は『サハリン物語』に付された「解題」であり、そこで展開されている「オーチェルク論」からエッセンスを拾ったが、不十分の感は否めない。カントロヴィチによると「オーチェルク」はロシア文学に独特の重要なジャンルとあるが、日本語の定訳はないようだから、片仮名転写で凌いでおきたい。オーチェルク作家が即ち「オーチェルキスト(očerkist)」である。

¹⁸ ヴィシネフスキー『オタス——サハリン少数民族の近代史』(2005)、『トナカイ王——北方先住民族のサハリン史』(2006)。

記事として発表した「憐れなる 北方民族よりの意見書（1～5）」¹⁹こそ、まさしくそれにほかならない。彼はそこで、己の信条と心情を「日本民族」へ向けて切々と訴えているが、このような1個人の政治信条が「樺日（かばにち）」紙の巻頭を5度も飾ること自体が、当時としては極めて異例な事態であった。

「意見書」の日本語原文を精読するならば²⁰、ヴィノクーロフは1930年代前半の混迷する極東情勢もさることながら、全世界の政治情況にも目配りを怠らぬ冷静な分析者だったことが強く印象づけられよう。彼の主張は、「青鷲」と形容される国際ユダヤ資本に支配された米英両国が——とりわけヤクーチヤの富源を狙って——東シベリアを略取する前に、可及的速やかなる「北進」策の着手を日本に求めることが、その骨子をなしていた²¹。

ところで、80年後の現代の知見を前提に「意見書」を読むならば、その時代錯誤は蔽うべくもない。ヴィノクーロフは日本の野望に加担してヤクーチヤの解放に賭けたアヴァンチュリストで、反ソ・反ユダヤ主義の権化に過ぎず、まさにその故に挫折する宿命の敗北者だった、と断罪するのは容易である。しかしながら1934年4月の時点では、すべてがいまだ流動的であって、第2次世界大戦とその帰趨までも洞察しえた者は、もしいたとしても頗る少数の具眼者に限られていたであろう。

評者は「意見書」を虚心坦懐に熟読した結果、ヴィノクーロフの真骨頂を「熱烈なるサハ愛国者」と断ずるに至った。再度にわたるソ連諜報員受諾も、生命の保全を図るための方便に過ぎなかったのではなかろうか。また同じ亡命ロシア人として、政治的スタンスを共有する「ロシア・ファシスト党」と共闘し²²、日本帝国の「大東亜共栄圏」構

¹⁹ 本書には「Pis'mennoe mnenie narodov Severa」という表題で、「意見書」の「大部分の」ロシア語訳が掲載されている（pp.147-51）。この露訳版は1993年のヤクーツク稿以降、若干の修正は認められるものの、初版にも第2版にも収められている。なお「意見書」は、ヴィノクーロフのロシア語による口述を梅宮富三郎が邦訳したものが、島谷榮二郎（正しくは榮次郎）の手で推敲されて成立したと明記してあるから、「樺日」紙への寄稿記事は恐らく正真正銘の原文であって、ロシア語原稿はなかったと推定される。したがって、口述者の意図が梅宮・島谷両氏によって捻じ曲げられなかったことを切望する次第である。日本語原文の書誌については「参考文献」中の「ウイノクロフ」の項を見られたい。

²⁰ 小山内道子氏の初版本邦訳（両書は基本的に同一作品である）は、ロシア語原文からの翻訳でなくて、「樺日」紙所載の「意見書」を転載しているが、現代文に直してあるため、私は新聞記事を自ら翻刻して精読した。それはまた、ロシア語訳のテキストをいくら熟読しても、彼の言わんとするところを把握しえなかったからでもある。とはいえ、「意見書」の日本語はかなり難解で、意味不明だったり、辻褄の合わない箇所も少なくないから、読み手に自前の解釈を強い、想像を逞しゅうさせる余地も残している。ロシア語への翻訳は、さぞかし困難な作業であったろう。参考のため、日本語版「意見書」の翻刻稿を末尾に付載する（「資料1」）。

²¹ ヴィノクーロフは3度目に上京した同34年8月、林銑十郎陸相の前ではほぼ同主旨の見解を、より穏和な表現で披瀝している（p.156、但し出典は欠如）。「意見書」は、情報源こそ明示されぬものの理路整然とした論旨で展開されている。「北進」策とは、ソ連と矛を交えて東シベリアを奪取する戦略であるが、中国本土から東南アジア方面へと戦線の拡張を主張する「南進」策とは、政府内でも軍部内でも暫く拮抗していた。日本政府は1940年7月27日の御前会議で、「南進」策を最終的に選択する。

²² 1931年以降のことと想定されるが、著者はハバロフスク地方国家文書館所蔵文書を引用して、「D・P・ヴィノクーロフはホルヴァート[ロシア・ファシスト党々首]により、『ヤクート州に

想に夢を託したのも²³、植民地体制に組み込まれた祖国を解放するための戦術ではなかったか。そしてスルベ氏をはじめとする現代のサハ知識人が、ヴィノクーロフを改めて再評価するのも、彼の本質を「サハ愛国者」と見做すからであろう。

なお、「意見書」を貫く強烈な「反ユダヤ主義」には注釈が必要である。ヴィノクーロフは「猶太のシオンの隠謀計画」が世界制覇の「最後の筋書」として、バイカル湖以東のシベリア奪取を画策していると警告し²⁴、またその推進者たるフランクリン・ルーズヴェルト米大統領は10ヶ年計画を策定して、着々と布石を打っているとも説く²⁵。要するに、彼の「反ユダヤ主義」は専ら国際ユダヤ資本へ、そして彼がその走狗と認識するルーズヴェルト大統領へ向けられていたが、ソ連が1928年に策定した「ピロビジャン計画」の進展も、間違いなく彼の「反ユダヤ主義」を刺激したであろう。ハバロフスクよりやや上流のアムール左岸に設置された「ユダヤ人自治区」が、1934年に「ユダヤ人自治州」に格上げされたからである²⁶。折しも同34年には日産コンツェルンの総帥鮎川義介が対米融和策を目途として、50万のユダヤ人難民を「満洲国」に受け入れる計画をぶち上げてもいた²⁷。

まことに僭越ながら、この機会を捉えて、ヴィシネフスキー氏にはロシア語版「意見

おける反ボリシェヴィキ活動を一括掌握する』代表に任命された」(p.119)と記している。1928年春には、在日亡命ロシア人組織のN・N・カレイェフ代表が来樺し、日ソ開戦の時機が熟したことを日本の要人——なかんずく天皇——に会見して訴え、広報宣伝にも努めるようヴィノクーロフを説得する(pp.93-4)。後者は1930年・33年・34年と3度に及んだ上京や、34年の「意見書」の公刊などをもってそれに応えた。とはいえ、1931年に発足した「ロシア・ファシスト党」との直接的連携を示すものは同文書だけであって、さらなる傍証データの提示が必要であろう。

²³ ヴィノクーロフの頼った日本帝国が実はまことに頼り甲斐のない相手だったから、彼は選択を誤ったわけである。とはいえ、当時としてはほかの選択肢がなかったことも考慮せねばなるまい。山室信一氏は佐高信・藤原作弥両氏との鼎談で、「もし『満洲国』という名称にせず、『ユナイテッド・ネイションズ・オブ・エイジア』(アジア合衆国)としたらどうだったろう」(佐高ほか1994: 113)と語っているが、同感である。もし名称通りの国家経営がなされていたならば、との条件付きではあるが……。

²⁴ 「意見書」(3)の本文。但し、この本文全体がロシア語訳では欠落している。「猶太のシオンの隠謀計画」の典拠は、偽書として名高い『シオン賢者の議定書』(*Protokoly sionskix mudrecov*)や、白系ロシア人組織が宣伝用に頒布した関連出版物であろう。日本でも同議定書は1919年に初めて紹介されて以来、「シオン議定書」「シオン長老の議定書」「ユダヤ議定書」などと邦訳されてきたが、その最新版は『定本 シオンの議定書』(四王天延孝訳、天童竺丸補訳・解説、成甲書房、2012)である。

²⁵ 「意見書」(2)の1項～4項。ロシア語訳では2項末尾と3項の後半部、つまり該当箇所がやはり省略されている。

²⁶ 高尾(1997: 59-64)。「満洲国」はアムール川を介して、「ユダヤ人自治区」と直に境を接していた。米国は1933年末、「ユダヤ人自治州」への昇格を前提としてソ連を承認し、「ピロビジャン計画」への支援に踏み切る。

²⁷ 秦(1993: 182)。この計画は1938年、「満洲国」内に「ユダヤ人自治区」を建設し、ユダヤ系資本の導入を図るという所謂「河豚プラン」として、「五相会議」で正式決定されたが、結局は実現しなかった。同プランの推進者らは、「大東亜共栄圏」構想の「五族協和」に代えて、「ユダヤ民族」も加えた「六族協和」を掲げたという。ヴィノクーロフは果たして、どのような思いでこの動きを見ていたであろうか。

書」の全面改訳を申し入れたい。すでに脚注(19、24、25)でも触れた通り、既刊訳文では、意図的になされたのかも知れぬが大幅な削除箇所が認められ²⁸、ヴィノクーロフの真意を汲み取ることを妨げている。また訳文は誤認・誤訳をあまた包摂しており、適正な翻訳とはとても言い難いからである。加えて、不正確な訳文にもとづく著者の判断が、事実とは齟齬をきたす事態すら見受ける²⁹。したがって、第3版を上梓される際は、評者のこの申入れを顧慮していただけると幸いである。

最後に、ヴィシネフスキー氏が歴史事象を取り扱う際の手法をめぐって、若干の議論を提起させていただきたい。

2. 偽書について

評者もヴィノクーロフの政治信条を醸成した重要史料として『シオン賢者の議定書』を挙げた。同書は周知のように「捏造書」であるが、彼の人物を理解する上では必須文献と判断したからである。しかし、ヴィシネフスキー氏が「田中上奏文(Tanaka memorandum)」に1頁の紙幅を費やして展開される議論には、些か首を傾げざるを得ない。氏は確かに「このメモランダムは当時の最重要偽書の一つだったようだが、……」(p.71)と断ってはおられるが、その内容は同文書を入手したソ連諜報員や、公刊後のセンセーショナルな新聞記事の紹介に終始し、「田中上奏文」の「偽書」性に対する明確な言及は見出されない。同書の来歴、即ち偽書であることは、微に入り細を穿って立証済みである³⁰にもかかわらずである。

3. 張作霖爆殺事件

解釈をめぐっていまだ評価が定まらず、ときには真向から対峙する言説が拮抗するような事件は枚挙に暇がない。カントロヴィチに倣えば、「オーチェルキスト」はそれでも己の旗幟を鮮明にすべきかも知れぬが、それもなかなか難しい。そのような場合、研究者はしばしば己を局外者の立場に置き、公平無私の各論併記という道を選択するが、研究者の良心を全うすべく採られる通常の措置である。そのような1事例として、1928

²⁸ ロシア語版では「意見書」(2)の2~3項の一部や(3)の本文全体のほかに、国際情勢に対するヴィノクーロフの現状分析と政治的判断が披瀝される(5)の後半部も削除されている。

²⁹ ヴィシネフスキー氏は「意見書」「追記」の露訳稿にもとづき、「トロヤノフスキーに関して、ヴィノクーロフはただ一つだけ誤りを犯した」(p.151)と記すが、彼は些かも誤っていなかった。著者はその根拠として、トロヤノフスキーが1934年1月8日、ルーズヴェルト大統領に信任状を提出した事実を指摘するが、「追記」の末尾に見出される「尚その上トロヤノウスキーは今在米中なり」(「資料1」参照)とは、まったく矛盾しない。誤っていたのは、トロヤノフスキーの渡米があたかも、これから出来るかのように描出した露訳稿の方であった。

³⁰ 服部(2010)。現代ロシアの歴史家V・Je・モロヂャコフ氏によると、ソ連期を代表する『大百科事典』ですら、青装丁本第2版(41巻、1956年)でこそ田中義一の「真作」と記載するものの、赤装丁本第3版(25巻、1976年)では「文書の信憑性には疑義がある」と明記された事実言及に言及した上で、『田中上奏文』は『日本人賢者らの議定書』と呼んだ方がよくはないか?! 田中義一はそれを作成せず、また天皇へ上奏することもなかった(Molodjakov 2012: 319)と明言されている。

年6月4日早朝に奉天(旧ムクデン、現瀋陽)で出来た「張作霖爆殺事件」を取り上げてみよう。

ヴィシネフスキー氏は同事件に関して、「張作霖撲滅作戦はハルビンのソ連特務機関長N・I・エイチンクトン(Ejtington)³¹が労農赤軍情報局諜報員X・I・サルニン(Salyn')³²とともに組織した」(p.98)と、本文では二人の諜報員の名を記すだけに留めているが³³、脚注では、「2003年8月1日、*Nezavisimoe vojennoe obozrenie* 誌」に発表されたD・P・プロホロフ氏の論文が典拠として示され(p.98、脚注5)、剩え両諜報員の経歴にまでもかなり詳しく言及されている(同、脚注3、4)。

推察するに、プロホロフ論文に目を通したヴィシネフスキー氏は、初版本での「結論を根底から見直す」必要に迫られた余り、そのさわりだけを抽出して記されたものと思われる³⁴。実は日本でも、同論文の内容はチアン・ユン(張戎)とジョン・ハリデイの共著書の邦訳版(2005)で紹介されていて³⁵、主として右派系論客らが、翌年には右派系紙『産経新聞』や同月刊誌『諸君』『正論』などで、まるで鬼の首を取ったかのようににはしゃいだ論陣を張っていた。

そこで評者もプロホロフ論文の参照を余儀なくされた³⁶。プロホロフ氏の両著述(「張作霖元帥の『無料乗車証事件』と「中国」)をダウンロードして閲読したところ、ヴィシネフスキー氏の引用に符合する記載は確かに見出された。だが、両諜報員がスターリンの命を受けて「張作霖爆殺事件」を組織したという論旨は了解可能であるとはいえ、一連の事実を裏付ける情報源が全く提示されていないことに一驚させられた。さらにプロホロフ氏はAPAグループ代表の元谷外志雄氏との対談で、「張作霖の事件への特務機関の関与を直接示すような書類などは、発見されていません。未遂事件も含め、さまざまな状況から、私はそれを確信したのです」³⁷と明言している。このままでは、長年の

³¹ 姓の綴りは不正確である。正しくはエイチンゴン(Ejtingon)。

³² 同様に、正しくはサルヌイン(Salnyn')。

³³ 但し初版本では「関東軍」将校が爆破を実行したと記載されていた(初版 p.47)。その間の事情は、第2版用に執筆された「自序」で、「若干の結論(例えば、1928年の中国人張作霖元帥の死をめぐる状況)に関しては、根底から見直すことになった」(p.8)と説明されている。

³⁴ 著者は本文で「……事件の原因に関する公式見解では、アメリカ人らと接触した張作霖に対する仕返しとして日本軍部が組織したとされている」(p.98)と、事件の片鱗は伝えているものの、「満洲事変」のきっかけとなった「張作霖爆殺事件」の歴史的解説としては不十分である。

³⁵ 英文原著はChang & Halliday (2005)。同書ではプロホロフ氏への言及を欠くものの、“This assassination is generally attributed to the Japanese, but Russian intelligence sources have recently claimed that it was in fact organized, on Stalin's orders, by the man later responsible for the death of Trotsky, Naum Eitingon, and dressed up as the work of the Japanese” (Chang & Halliday 2005: 181, footnote) と記載されている(該当する邦語訳は「チアン、ハリデイ(上巻) 2005: 301」に収録)。

³⁶ *Nezavisimoe vojennoe obozrenie* 誌を所蔵する機関が日本では見つからなかったが、プロホロフ氏の論文(Proxorov 2003)はインターネット検索でようやく発見、閲読することができた。同氏が2000(?)年に上梓した『参謀本部情報総局帝国』の1章「中国」も同様にダウンロードして目を通した。やむを得ざる便宜的措置であるが、いずれでもその信憑性が十分に担保されていることを切望してやまない。

³⁷ プロホロフ、元谷(2009)。URLは「参考文献」を見られたい。ここでも忸怩たる思いでネッ

研究蓄積に裏打ちされた——関東軍参謀河本大作大佐を首謀者とする——「関東軍陰謀説」に、到底太刀打ちできないであろう。したがって、ヴィシネフスキー氏も当面は両論を併記されるべきではなかったか。

* * *

ヴィシネフスキー氏は21年以上の蘊蓄を傾けて本書を擱筆されたが、「ヴィノクーロフ伝」はいまだ未完成である。そこで提案であるが、ロシア・日本・サハ共和国などの同憂の仲間を糾合して、ヴィノクーロフに関する国際的共同研究プロジェクトを立ち上げられては如何だろうか。その成果として、完本『ヴィノクーロフ評伝』の上梓を期待するのは、評者だけではないと思われる。

参考文献

Chang, Jung, and Jon Halliday

2005 *Mao —The Unknown Story*, London: Jonathan Cape

チアン・ユン（張戎）、ジョン・ハリデイ共著、土屋京子訳

2005 『マオ——誰も知らなかった毛沢東』（上）講談社

秦郁彦

1993 「河豚（ふぐ）プランと日本——ユダヤ論の系譜」、秦郁彦『昭和史の謎を追う』（上）173-89、文藝春秋社

服部龍二

2010 『日中歴史認識——「田中上奏文」をめぐる相克 一九二七—二〇一〇』東京大学出版会

Kantorovič, V.

1971 *Saxalinskaja povest'* (サハリン物語), Moskva: «Xudožestvennaja literatura»

河野廣

1991 『幻の馴鹿部隊』（解説付写真集）、旭川刊、私家版

菊池俊彦

1997 「第二三巻 北の民俗誌——解説」、谷川健一責任編集『北の民俗誌——サハリン・千島の民族』（日本民俗文化資料集成 23）551-70、三一書房

Kuznecov, M.

1971 “Vladimir Kantorovič (ヴラヂーミル・カントロヴィチ),” in: Vladimir Kantorovič, *Saxalinskaja povest'*, 5-20

Molodjakov, V.Je.

2012 “Tanaka Giiti v poiskax vzaimoponimaniija (相互理解を模索する田中義一),” in: Vasilij Jelinarxovič Molodjakov, *Rossija i Japonija v poiskax soglasija 1905-1945. Geopolitika. Diplomatiya. Ljudi i idej*, 315-20, Moskva: AIRO-XXI

ト情報を援用するが、プロホロフ氏の発言が忠実に記録され、また正確に邦訳されていることを切に望みたい。

Proxorov, D.P.

2000(?) “Kitaj (中国),” in: Dmitrij Petrovič Proxorov, *Imperija GRU—Epoxa «velikix nelegalov» (1921-1937 gg.)*

<http://www.agentura.ru/dossier/russia/gru/imperia/nelegal/kitay/> (accessed 19 Sept. 2014)

2003 “«Liternoe delo» maršala Čžan Czolinja (張作霖元帥の「無料乗車証事件」),” *Nezavisimoe voennoe obozrenie* ——ヴィシネフスキー氏の記載では「2003年8月1日刊」と解される。

http://nvo.ng.ru/history/2003-06-27/5_prigovor.html (accessed 19 Sept. 2014)

プロホロフ、ドミトリー、元谷外志雄

2009 「【特別対談】1928年の張作霖の爆殺事件はソ連の特務機関の犯行だ」——サンクト・ペテルブルグで行われた対談の日付は、URLによれば「2009年12月」と解される。

<http://www.apa.co.jp/appletown/pdf/taidan/0912taidan.html> (accessed 10 Sept. 2014)

佐高信・藤原作弥・山室信一

1994 「膨らまし粉入り『満洲・夢のまた夢』——戦時統制国家の実験場」、『満洲国の幻影 1931-1936 (大日本帝国の戦争1)』105-117、毎日新聞社

庄司宏

1937 『民族最後の人々——オタスの土人』敷香：樺太印刷社

高尾千津子

1997 「日本側から見た『ビロビジャン計画』——両大戦間日本におけるソビエト・ユダヤ認識」『社会科学研究』43/2: 59-85、早稲田大学アジア太平洋研究センター

ウイノクロフ (ヤクーツ民族)

1934 「憐れなる 北方民族よりの意見書」(1) 4月21日付、(2) 4月24日付、(3) 4月25日付、(4) 4月26日付、(5) [原記事では(4)と記載] 4月29日付『樺太日日新聞』朝刊1面、豊原——翻刻稿が「資料1」として末尾に収録されている。

Višnevskij, N.V.

1993 “Kupec Vinokurov (商人ヴィノクーロフ),” *Poljarnaja zvezda* 2: 124-144; 3: 145-160, Jakutsk

1994 *Otasu—Etno-političeskie očerki* (オタス——民族・政治的オーチェルキ), Južno-Saxalinsk: Dal'nevostočnoe knižnoe izdatel'stvo, Saxalinskoe otdelenie

ヴィシネフスキー、ニコライ、小山内道子訳、菊池俊彦解説

2005 『オタス——サハリン少数民族の近代史』北海道大学大学院文学研究科

ヴィシネフスキー、ニコライ、小山内道子訳

2006 『トナカイ王——北方先住民族のサハリン史』成文社

参考資料

本稿は、ユジノ・サハリンスクのB・ピウスツキ遺産研究所の依頼で執筆された書評の日本語元稿、同研究所『通報』19号に露訳稿が収録される予定である。元稿には、ヴィノクーロフの「意見書」露訳版における誤認・誤訳を例示すべく、「意見書」(1)の前文と本文冒頭部、第2段落の前文、そして末尾の「追記」に対する評者のロシア語試訳が提示してあるが、本稿では本誌編集部の御判断で全面的に削除されている。

その代わりに、2件の参考資料を以下に付載する。

「資料1」は、評者が樺太日日新聞所載記事を翻刻した「憐れなる 北方民族よりの意見書(1~5)」である(脚注20参照)。一義的には、「論評」部の(1)で展開した小論の典拠として読まれることを希望するが、「意見書」の意義はそれだけにとどまらないであろう。50才のヴィノクーロフがその絶頂期に残した唯一の著述は、彼の人となりを知る上で最も注目すべき資料にほかならない。「意見書」を発掘・露訳して公刊されたヴィシネフスキー氏の炯眼には、改めて敬意を表したい。

「資料2」は、ヴィノクーロフの愛娘ヴァルヴァラが好意を寄せた日本人青年、河野廣氏宛書簡2通の翻刻である。ヴァルヴァラに対するヴィシネフスキー氏の辛い採点(脚注11参照)は、ヴィノクーロフの元使用人や、戦後の零落した彼女を知る人たちからの聴書きなど、その情報源の偏りに起因するものと思われる。なお、河野氏は晩年の著書にヴァルヴァラ書簡の写真版(河野1991: 61)を掲載されるだけでなく、北大附属図書館北方資料室への寄贈本には「補遺資料」も添付されており、そこには第2書簡のコピーも見出される(脚注44参照)。本件は、河野氏の青春時代の思い出の所産といえるであろう。

資料1

憐れなる 北方民族よりの意見書

ヤクーツ民族 ウイノクロフ

(1)³⁸

極東北方西比利亞ヤクーツの大領土に住む小民族より大日本帝國民に對し謹て我同胞の運命のために私をして地理と歴史と現實に即して余儀なく本意見書を奉呈せざるを得さらしむ。

現實にして未曾有の危機とは既に周知の如く現在の慘虐無道なる赤きソヴェート政權により吾等民族は前記神與の大領土より、完全に名實共に離反を強要せられつゝあるものなるを。

私は御承知の通り大日本主義の一努力者にて私が生活上の意識を知りたるその當時より現ソヴェート政權に絶對反對の堅き思想を持し爲めに自らの運命として帝國南樺太に亡命〔、〕假の生活を貪り居るものに之有ことは是又周知のことである。

而して吾ヤクーツ民族の現在における近況等に関しても例へ現ソ聯の嚴重過酷なる國境封鎖にも拘らず世界各地を経由するあらゆる情報により略明知し得る、

然り、今やアジアの大寶庫北方ヤクーツ洲は憐れにも吾等ヤクーツの手より遠く離れんとする刹那にあり〔、〕國又は民將に亡んとして其聲悲し〔、〕私は其一愛國者としてその熱誠なる意見を神明の前に大日本天皇陛下の前に又祖先の前に宣誓し〔、〕貴國民に開陳し以て右吾等民族を救済されんことを嘆願して止まず。

只私として最も畏多きことは政策遂行の影響として平常關係あるが如き日ソの國際關係を悪化に伴ひ爲めに大御心を御煩し奉る事あるを慮り〔、〕その罰重大なりと常に痛感し自負の念に絶へざるものあり。然しながら吾等亞細亞民族の何人たるを問はず本問題に至る時、即ち吾等の大亞細亞洲より大領土が遠く離れ去らんとしつゝあるを知るべし。

北方アジア大陸は、地理的にも歴史的にも、自然的にも完全にアジア〔ママ〕の領土にして又將來アジア民族十億民衆の絶對的經濟根據であり、東洋平和の地盤基礎である。

現在世界の動向より見てこの北方大領土の變化はアジアの先進大国に對する、非常なる危機〔、〕將た亦全アジアの危機にも價するものと信ずるが故に私は萬障を忍び且つ自責を重んじ、成さざらんとするも成さざるを得ず。茲に告白せんとするものにして、此の告白的私の微衷は必ず度量ある大國民として、寛恕せらるべきものと信ず。

抑北方アジア大陸は自然の神に附属するものにして當然大日本帝國の日章旗の力によりて救済保護せらるべきが自然の道理と信ず〔、〕然るに忽如近く又急速に青鷺大群の飛翔を見んとは頓て、その大翼が北方大陸を蓋ふところのものなるも、實に目睫の間に迫りつゝある状態である。

吾等北方民族の熱望は歴史的に最も深淵なる意義を有する、日章旗が吾領土を蓋ふことにあり〔、〕然し太陽の光熱は自然序々にして、自らは不動停止の状態に於て、地球自身が自轉して、その恩恵に浴するものであるが〔、〕例の青鷺は今日迄世界を廻り、到る處黄金の我

³⁸ 『樺太日日新聞』昭和九年四月二十二日付朝刊一面(第八千二十四號、1934)。原文に付されている「ルビ」は省略した。

慾を充たし、今に於ては飛翔する價值なきを知り、北方大陸吾等の領土以外には自由なる天地なきを以て遂に先般來亞細亞大陸に飛翔し初めたり

吾等は嘗て北方亞細亞大陸を共產暴力を使役利用して侵略せんとする[、] 又あらゆる左翼の指令ともなり、最高の利益の享受者の眞の元凶の本態はそも何者であるか、を極めざりしが[、] 最近漸く其の露骨なる政策實行により、明知するを得た、之れ他にあらず、先般世界平和正義の潮流を無視して、果敢なるソ聯の承認を遂行せる最も蓋世の英傑急進政治經濟家[、] 術策縦横なる白亞館主米國大統領ルーズベルト氏なりとは[。] 私は茲に於て徒に偷安座視するを絶対に許さずと決意するに至り[、] 私の小智取るに足らざるも、及ばずながら亞細亞人として、亞細亞を護る、責任感よりあらゆる困苦と悲運に翻弄され永き體驗の結果、彼等ユダヤ人の一舉一動を、嚴視し來りしが最近彼等の隱謀の大略を知るを得て慄然としたり

(2) ³⁹

此の恐るべき最近の隱謀とはそも何であらうか。即ち左記米國として世界に優越せる利益四項中に歴然たり。

第一[、] 世界の有らん限りの金を米國に集中[、] 大金保持主義を以て、世界の王座に現在も將來も君臨し、自ら爲替利率の中心統御に任し、恒久不斷の利益を一手に收握し世界終局迄世界經濟の覇者たらんこと。

第二[、米國は] 今日まで世界資本の王者を以て任じ[、] 工業資本として各國に莫大なる債権を有する[。] 之れは金塊を以て受取る筈なりしが、最近債務各國は殆ど不拂状態となつてゐる。之に驚きたるルーズヴェルト[ママ]は政策を轉換して[、] 金塊の代わりに生産過剰に困りつゝある各國より其工農業の生産物を以て回収し[、] 此の物資は恰もソ聯の第二次五ヶ年計畫未完成[、] 且つ國內は極端なる物資の窮乏を訴へてゐるに乘じ[、] 一方各國よりは安價に受取り、之を高價に全ソヴェト聯邦領内に轉賣供給し大なる利益を納めつゝ領土的には、北方西比利亞の富源開發に、先鞭を付け、無限の大利益を享有し、やがては其の領土をも侵略せんとするものである。

第三[、] 猶太民族は全世界を[ママ]亘り大資本を擁しつゝありしが、最近ドイツ小亞細亞其他各地に於て領土的に放逐の運命に遭へり、之れが爲めに埋合わせ的に、領土的保障を痛感し、其の領土を荒漠無人と埋藏金富源其他あらゆる資源に於て世界に冠絶する最適地たる北方シベリヤの大部分を占むる、ヤクーツ洲に求め、自國の建設に着目し、餘裕ある全世界ユダヤ資本中の一割を世界に率先して投下し[、] 然も火水に捨つるが如き遠大果敢なる心境の許に將來のアメリカの爲に移殖の種子として、投じ後には完全にユダヤ領土となさんとする計畫なり。而して最近日本が指導者として滿洲國を建[、] 今後十ヶ年当分滿洲國內の産業開發の爲全力を盡して止まらんとするを看取するや、米國も亦北方シベリヤに十ヶ年計畫を樹立し、日本に對してはあらゆる平和外交方針を以て對し[、] 日本は滿洲以南に於て多忙なる如く仕向けるべく、外交工作を行ひ[、] 日本が過

³⁹ 『樺太日日新聞』昭和九年四月二十四日付朝刊一面（第八千二十五號、1934）。

去に於て、北方シベリヤを研究せざりしを好機とし、將來も亦絶対に興味を喚起せざるやう誘引に努める、而して、ルーズベルトの秘密訓令に曰く「吾々猶太人の投ずる一割の資本は當然來るべき有色民族と、白色民族との鬭争に先立ち北方のアジヤ民族の懷柔に用ひ米国に有利に展開せしめ國土獲得の礎石となすことを忘れてはならない」

第四、猶太民族の一割の資本投下は直ちに、九十九パーセントの確實なる利益を然も、ヤクーツの埋藏金によりて收獲し得べく、世界最大の金保有國となるを得べし

(3) ⁴⁰

而してソヴェート聯邦の第三次五ヶ年計畫遂行中、第四次五ヶ年計畫立案前項には自己の努力確立せる時[、米國は] 好機を逸することなく在西比利亞ソヴェート聯邦有力幹部は全力を以て、二十四時間内に完全に社會より葬り去ることを得べしと信じて居り[、] その後は完全な資本主義國として猶太資本を中心に西比利亞各民族と永遠の繁榮を招徠せんとするにあり。

若しアジヤの寶庫ヤクーツ洲が理想通り吾々猶太によりて獲得し得るならばアジヤ十億の民族の各自はその將來における、生活基礎豫備金を完全に失ふべく、今後永久に經濟競争の上に吾に對抗し得ざるべし。と

斯る計畫隱謀が万一成功することあらば、これは神の寵者に非ずして、惡魔の仕業である、全アジヤ十億の民衆がこれによりて將來の生活を保障せらるべきアジヤの富源はかくして彼等の横領専恣なる飼食となり終わるであらうか。

以上の如き計畫なるが故に全米国民の考へはこの際空しき外交の口先にて瞞着せんがため、茲に滿洲國を外交的に承認する方法に出るべく、次て、ソヴェート聯邦をして滿洲國を承認せしめ、極東平和に藉口して日本を引入れ、茲に紛争關係にある完全なる三国連衡の不可侵條約の締結とまで導き、正義にして武士道的なる日本は過去における日露戰役當時の締結したるポーツマス條約時代米國の恩顧を忘れず[、] 故に容易に承諾すべしと思惟し居るなり。

尚日本の北方に於ける唯一の事業たる北洋漁業問題に對しても、ルーズベルトはソヴェート代表に向かつて曰く

「ソヴェート露國は米國との相互提携を重んずる爲めに、日本の外交に對しては時に讓歩の態度を要し、機宜に應じ一進一退可成[、] 日本の強硬外交策を避け、場合によりては政策的に北洋漁場を日本に割讓するも可なり、又或る場合日本が斷然赫怒したる時は其の鋭鋒を避くる一時的安靜の餌として北樺太を割讓するの覺悟を要す」と

以是視此、日本が滿洲國を中心にして、向後十ヶ年開發の爲めに滿洲に止まる間に彼等は、極東西比利亞[亞]（バイカル以北東）に對し、同じく十ヶ年の計畫を樹立し、其の優越なる資本の一割と凡ゆる溫情主義を以て饑餓と暴政に虐けられつゝありし、五百万人の民族に接するものなれば相當の喜悅を以て歡迎せらるゝや事明の理なり

而して其の間日本の蹶起進出を不可能ならしめ全世界唯一の豫備領土たる北方を外交的に略取せんと作動中なのである。以上は其の欺瞞政策の大要であり、猶太のシオンの隱謀計畫の最後の筋書でもある。其の結果として亞細亞十億の民衆をして、退嬰微力再起の力な[か]らしめ、現在の民族五百万人に國境警備五百万人を世界のプロレタリア

⁴⁰ 『樺太日日新聞』昭和九年四月二十五日付朝刊一面（第八千二十六號、1934）。

を加へ[、] 之が指導に猶太民族五百万人を以て任じ[、] 計一千五百万人の白人を以て鋭意ヤクーツの富源開發に従事するであらう[、] 而して世界最大最高の富源開發者として其目的を達成するに至るであらう

(4) ⁴¹

斯に於て、初めて全亞細亞十億の民族は、此の場合敢然として、亞細亞人の亞細亞、西比利亞人の西比利亞を返せと蹶起するに至るであらう、勿論數に於ても實力に於ても彼等は亞細亞民族の敵ではない、然し横暴なる白人に、未開神秘の富源を任せ且つ同じく之が奪回の爲めに流血の闘争を開き多大なる犠牲を拂ふことは、千載の恨事であり民族發展の爲めに[、] 否亞細亞の爲めに忍びさるところである。斯ることは未然に或は事前に防止し或は最少限度の犠牲を拂ふことによりて目的に達する如く善處することを考慮せねばならぬ、この事は日本及支那の最も近隣なる富源なるが故に最も急速なるを要する問題である。北方亞細亞小民族の自決は即ち東洋平和を齎し民族繁榮の基ともなるものである

猶太系資本が、西比利亞ヤクーツ開發に投下されたる場合、保有金の亞細亞に於ける歩合は、東洋人は三割五分である。此の三割五分の産金率は十ヶ年後には關稅障壁により皆無となるであらう、これは東洋政策上日本に採りては由々敷問題でなければならぬ、否亞細亞全民族の興亡に關する問題である。

然らば米國は如何？

米國は西比利亞のヤクーツの富源及領土を[、] 最新科學を應用したる産金工業智識によりて純金を得ること將に前述の如く九九パーセントである

産金比較表

一、日	本	一割の利益
二、支	那	五割の利益
三、朝	鮮	四割の利益
四、滿	洲	六割の利益
五、シベリヤ		九割の利益

但し過去の産金率なるも工業組織を利用することによりて九九%まで高むることを得べし而して日本を中心とする東洋人の領土に有する金と民族の所有する金を加へるに即ち三割五分である[、] 併しこれは急激なる産物輸出激増に伴ひ世界の高き關稅重課によりて、相殺せられ失はるゝや明かなり。斯る結果滿洲十ヶ年計畫案に依る、全支を中心とする事業は[、] 東洋における凡ゆる發展する産業の全利益は、其の終局に於て、純然たる東洋國の紙幣に化し了るであらう、故にこれに關し亦ルーズベルト大統領は曰く

「若我十年計畫中に於て、日本が急激に且つ強硬なる、軍事行動を起し無事に十ヶ年を経過せば吾々は全問題に於て世界に絶對不動なる基礎を獲得するであらう。並に軍事的重工業完成により、絶對に恐るゝに足らぬ、故に日本の對滿政策には決して壓迫を加へてはならぬ、此の爲めには危機防止の外交手段として凡ゆる方法を講じ[、] 日本は鋭鋒を避け外交を軟化せしめ偽瞞せねばならぬ、而して吾等は當然世界に共通の平和愛好

⁴¹ 『樺太日日新聞』昭和九年四月二十六日付朝刊一面（第八千二十七號、1934）。

を方針とせねばならぬ[]」。と

亦、曰く「ソヴェートロシア全部は我々に必要とせぬ、只シベリヤのヤクーツのみ必要とす、只吾に十ヶ年の時を藉さば、シベリヤにおける吾目的は成功するであらう、この場合、スターリンが歐洲に於て何時失脚するとも吾に何等の關係をも有せず、吾々にとりてはシベリヤの隣國日本が唯一の脅威である、故に米國は金以外のものならば、日本の國債借款の申込に應ずる準備あり」[]。更らに曰く「此の回収には何らの杞憂を必要とせず、何となれば日本は極めて紳士的に條約を嚴守する國なるが故である」[]。

(5) ⁴²

私は現下世界政狀をみるに左記の如く思惟す「猶太人に對して世界の猶太人排斥の先鞭を着けたる獨乙のヒットラーに對して米[國]は絶對的に資本の應援を辭退する、ヒットラーがオーストリアは以前の如く共同提携して行けるものとして、對露強行策の猶太人排斥をなすとともに、ソヴェート露國に對して打撃をあたへる計畫をなしたが、佛國はサール洲問題のために、獨佛不和なるを以て、獨乙とオーストリアとの離間策を講じ、獨乙を苦境に立たしめんとした。斯くしてオーストリアを失ひ微力となれる獨乙のヒットラーは、一度追放を爲したる猶太人に叩頭し、ソヴェート露國にも亦歡を通せざるを得ない苦境に立つに至つた」[]

これを看取した伊國のムツソリニが、フワツシヨズム[ファシズム]の勢力の没落するを虞れて、ドイツのフワツシヨズムに協力する外交的手段を講じ、ドイツより離反したる、オースト二リヤ[ママ]を、フワツシヨズムに引入れハンガリアと提携聯合の三國結合をなすに至つた。斯に於てドイツは恰も別國の如くなるも眞髓は同じくフワツシヨズムなり

換言すれば、即ち四國はフワツシヨズムを以て結合したるものなり。世界戦争の勃發するに至らば直ちに二十四時間以内に帝制に變更するに可能なるものである。故に佛國は最も不利なる立場に置かれたるものなり、佛國及イスパニア[ママ]の左翼主義戦争は没落して、四ヶ國の右翼のフワシヨズム[ママ]によりアフリカより影を没し、日本はエチオピアとの修好關係に於て同じく、この道程を繰返すべく、而して日本とエチオピアとの修好關係も亦拋棄するに至ることあるを。佛國の惡戯は、エスパニアよりモロツコ略奪の野心を以て、エスパニアの革命を爲さしめんとしたが自己も亦、アフリカに於て何物も得ないと共に、四ヶ國より反對の立場に置かるゝに至つた。アフリカの主權は即ち四ヶ國に移りしことになつたのである。

斯る必然的形勢の變化により佛國は急速に、ソヴェートロシアと攻守同盟を結ばざるを得なくなつた。この場合佛國は白系ロシア人司會の側面打撃によりて革命は佛國內に勃發するに至るであらう。これ第二のエスパニアである。その上に右の四ヶ國が、亞細亞の支那に於て蔣介石及び張學良の吾黨をしてフワツシヨズムの建設をなさしむること明かであり、この場合日本の立場は一層困難なるものとなるであらう。

アメリカ大統領又思ひらく「我米國として最も行動を一になすは英國である、今後は英國内の同一民族を同資本を合併して事業を起すであらう」、と。即ち黒龍江上流シ市

⁴² 『樺太日日新聞』昭和九年四月二十九日付朝刊一面(第八千三十號、1934)——但し、原記事では「意見書(4)」と記されている。

におけるアジア民族聯盟會議席[に於て?、][シ]ルカ川よりレナ大河の上流を[、]黒龍江上流との中間を縫ふて産金地帯を英國が鐵道敷設をなすことになり、米國は北氷[洋]の汽船の終點のカレム[コリマ]河口より、上流に向かひ、アイモコン[オイミヤコン]、ウエルフアヤン[ヴェルフネ・アヤン]方面を經由して同じく産金地帯を通じ[、]英國の鐵道にアルダン河の附近に於て相會す、その米國の行動の根據地であるのはアラスカである

これ十年間に完成せんとする政策の大綱である。而して英米提携して世界の太平洋の關門たる新嘉波[シンガポール]に一大海軍根據地を築造し、北方はエニセイ河よりも北方東經百〇五度附近ムスタ河に同じく根據を定むるものである」と。最近大連上に於て如何なる問題が議決されるか、英米のアジアに対する政策に對して如何に之を目されしや、我等北方に責任ある民族として、且つ赤裸亡命である。私はこの會議に列席することが出来なかつたことを以て、大なる罪ありと考へ其の責を自覺してゐる。而して此等代表者によりて議決されたることが我々小民族に關與しあるものならば併せて、決議案を將來安心の爲めに一切を知れる愛國者より教示せられん事を。

事實今や北方八民族は、如何にしても亞細亞北方大富源は、我々の微力によりては、擁護することの不可能なることを關知して大連に於て決議されたり[。]小民族自決大會に迎合的に、此の一文を發する所以である。私しは大連に於ける會議の内容を知ること、得ないが出来得べくんば、北方大陸も同じく亞細亞の領土なることを確認せらるゝと共に[、]歐洲白人によりて武装さるゝ前に、急速かつ斷乎として、北方亞細亞の小民族の武装を議決せられ度希望を有するものである。

惡魔の包圍政策の護得に委することなく、此の問題は最高より最下級の日本民族の健全なる智能の判斷と英斷及實行を希ふ

追記

モスコワより極秘訓令に極東國防軍司令部ブリユツフエル[ブリュッヘル]將軍をして近くルーズベルトと交渉のため米國に派遣するとのことあり。本件は重大なる亞細亞の關心事たるを銘記すべし。尚その上トロヤノウスキーは今在米中なり。

通譯 梅宮富三郎
文案 島谷榮二郎

資料2

ヴァルヴァラ・ヴィノクーロヴァの河野廣少尉宛書簡

(1)⁴³

コウノショウイ様オンモ[△][ト] ニ
 ハイケイ オテがミアゲテ シツレイシマス。
 ブジデオツキノコトト オモイマス タイヘンデシタデシヨ
 アタシノトコ^[ニ]オヨリシテ イタダイテアリがトウ
 ゴザイマス。ナニモ オカマイシナイデ オユルシ下サイ
 ココカラシツパツシテ ナンジコロトクソ川ヘツキマシタか。
 ヘイタイサンタチミナスツカリ ノビタデシヨ。山本オジイサン
 モ、ハシモトオジサンモオツカレノコトデシヨ。アナタモ。オツカレ
 ノコトデシヨ ブジデ。エンシユウがスミマシタデシヨウネ
 山ハ イかがデスカ テントウ。セイかつモ トキニハ イイデ
 シヨ、ウ。キノウ アナタサマタチ^[ノ]タツタ アト。ヒツソリシテ
 サビシク ナリマシタ。キノウ一日スツカリ。ヒカンシテ。
 ミナヤスミマシタ モシ ブジデ上敷^番[香] ヘオカヘリニ
 ナリマシタラ、ウチヘモ アソビニイラシテ下サイ。
 コンドツマラナイモノデスケレド。トナカイノかわデ
 ツクツタ。サイフ ウチヘかヘリマシタラ。オオクリ
 シマス。ウケトリ下サイ。ワタクシモ モシカ
 スルト コンゲツパイ 山ニイルかモ シリマセン。山ハ
 トテモ サビシクテ、シカタがアリマセンワ。ハヤク
 シクかヘ かエリタインデスケレドモ、ホントニ ヲカワイ
 ソウデシヨ。ドウジョウシテクダサイ、ネホントニ、
 ウチウラニ今日 オヂサンが大キナクマノアトが
 アツタソウデス ウチノトナカイ。コノアイダカラ
 ゼンブミヘナイデス。ヤラレタンデナイデ
 ショウか。コンド山ヘ トナカイ サがシ
 シナクチャナラナイデス。コマツテ
 オリマス。クマハ ホントニ ヲソロシイワ。
 ダケドモ 女デスモノ。オトコニ ウマレタかつタワ。

⁴³ 河野 (1991: 61)。筆者は単に「芳子」と署名しているが、これはドミトリー・ヴィノクーロフの娘ヴァルヴァラ (Varvara Dmitrijevna Vinokurova) の日本名である。片仮名書きの「文」とはいえ、立派な日本語である。河野 (かわの) 廣氏は1939年12月から上敷香で、樺太独立混成旅団歩兵大隊機関銃中隊附少尉としてトナカイと犬の軍事利用研究に従事していた。文中で言及される「演習」については、『旭川春秋 CITY ガイド』に「研究二年 (つまり1941年) にして二泊三日の旅団演習を行い……」(p.20、「補遺資料」中に見出されるコピーより引用) とあるから、本書簡は演習直後の「1941年」6月19日に執筆されたことが判る。

ソウシタラ クマタイジニ イクノニ ホンニ
 女ワツマラナイワ。デワ コレデ シツレイ
 シマス。ヨクナオシテ ヨンデ 下サイ。
 ハジメ。
 一、ハシモトオジイサマ
 二、ヤマモトオジイサマ
 三、マスキオジサマニ トクニヨロシク
 オツタヘ下サイ ヘイタイサン[ノ]ミナ様ニヨロシク
 オカラダヲ ヲダイ[ジ]ニ サヨウナラ。
 六月十九日 芳子ヨリ

[漢字仮名交じり現代文への転写]

河野少尉様 御許に

拝啓、お手紙を差し上げて、失礼します。

無事でお着きのことと思います。大変でしたでしょう。私のところにお寄りいただいて有難うございます。何もお構いしないでお許し下さい。ここから出発して、何時頃、トクソ[床佐?] 川に着きましたか。兵隊さんたち皆すっかり、のびたでしょう。山本おじいさんも、橋本おじいさんもお疲れのことでしょう。あなたもお疲れのことでしょう。無事で演習が済みましたでしょうね。山は如何ですか。テント生活も時にはいいでしょう。昨日、あなた様たちが発ったあと、ひっそりして寂しくなりました。昨日一日、すっかり悲観して皆休みました。もし無事で上敷香へお帰りになられましたら、家へ遊びにいらしてください。今度、つまらない物ですけど、トナカイの皮で作った財布を、家へ帰りましたらお送りします。お受け取りください。私ももしかすると今月一杯、山にいるかも知れません。山はとても寂しくて、仕方ありませんわ。早く敷香(しくか)へ帰りたいんですけども、本当にお可哀相でしょう。同情して下さいね、本当に。家裏に今日、おちさんによると大きな熊の跡があったそうです。家のトナカイは、この間から全部見えないです。やられたんでないでしょうか。今度、山でトナカイ捜ししなくちゃならないです。困っております。熊は本当に恐ろしいわ。だけでも女ですもの。男に生まれたかったわ。そうしたら熊退治に行くのに、ほんに女はつまらないわ。では、これで失礼します。よく直して読んで下さい。

始め。

- 一、橋本[橋口樺太独立混成旅団副官?] おじいさま
 - 二、山本[同獣医部長] おじいさま
 - 三、マスキ[松木少尉?] おじいさまに、特に宜しくお伝え下さい。
- 兵隊さんの皆様にも宜しく。
 お体をお大事に。 さようなら。

[1941年] 六月十九日

芳子より

(2) ⁴⁴

ハイケイ

オテガミ ホンヂツ タシカニ ウケトリ マシタ ウレシク
 アリガタクハイケイ^[ン] シマシタ。アリガトウゴザイマス。
 アナタサマカラ オヘンジ クダサルトワ オモイマセンデ
 シタ ホントウニ ウレシイデス。七月二日ニ ウケトリ
 マシタワ。ブジデ オカヘリニ ナリマシタトノコト
 アンシン シマシタ。山デワ アナタサマガ オカヘリニ
 ナリマシテカラ ナニモ オカワリアリマセン。コンゲツノ
 五日 コロ シクかエ かヘリマス。かミシクカワ、
 ナニか カワツタ ニユスガ アリマセンデシヨウカ
 スツカリ ナツニ ナリマシタワネ キレイナハナが
 サイテ トテモ ウツクシイワ。ソチラモ ニギヤカデ
 シヨネ。山ノ 人タチモ ミンナ ゲンキデ、ハタライテ

1/2

オリマス。ワ クマハ。ダン／＼ヒドク ナリマシタ。
 ツイ二三日^[マエ] ウチノキンジョデ トナカイノ シガイ
 三トウ ミツケマシタワ。トテモ ヒドイノ カワイソウデ
 スワ。ホントーニ、アタシガ かヘリマシタ アト ドウナルデ
 シヨネ コノアイダ ナクナツタ トナカイ ハンブシ イジヨウ
 ミツケマシタ マタ アト スコシ ミツケ マセン
 イツシヨウケンメイニ サガシテ オリマス。
 クニノタメデスカラ。フンバツテ オリマスワ。コンドノ
 エ^[ン]シユ^[ウ]ワ、イツコロ ニナリマスか。十五日ニ ナルヨウナ ハナシガ
 キキマシタ。ワ コンドモ ナカ／＼ イソガシイデ シヨネ
 イツシヨウケンメイニ ヤツテ クダサイ、クニ ノ タメデ
 スカラ。コンドワ ドチラヘ エンシユウニ イキマスか。モシ
 ヤマエ イラツシヤル ヨウデシタラ、テントエモ ヨッテ

2/3

クダサイマセ。山ノ人タチワ ミンナ タノシミニ シテ
 オリマスワ。コレワ ツマラナイモノデスグレドモ、
 トナカイノ カワデツクツタ サイフ、オクリマスタカラ

⁴⁴ 河野廣宛、1941年7月2～5日の摺筆(脚注45を参照)。ヴィノクーロフの娘ヴァルヴァラは、父親の日本名「上野九郎夫(ウイノクロフ)」に倣って、「上野芳子」を名乗っていた。この手紙は、敷香北方2キロの振戸放牧場より特務機関の毛利尚夫(のちの竹下洋一)氏に託されて、河野氏の許へ届けられたとあるが、そのゼロックス・コピーが北大附属図書館北方資料室所蔵本の「補遺資料(河野氏提供)」中に見出される。同封された「革財布」と「花瓶敷」の写真は、河野(1991: 60)に収録されている。

ウケトリ クダサイ オイソがシイトコロへ、オテガミ
 アゲテ オユルシ クダサイマセ デワ ミナサマニ ヨロシク。
 オカラダヲ オダイヂニ アナタサナノ ゴケンコウト
 コウフクト ヲ カミサマニ オイノリシテ オリマスワ。
 デワ サヨウナラ。

コウノヒロシサマ

上野芳子ヨリ。

3/4

シツレイデスケレドモ コノ テガミガ モシ
 ソチラ エツキマシタラ ヲヘンジ 下サイマセ。
 オネガイシマス。オマチシテオリマス。

コウノ シヨ[ウ]イ様エ

サヨウナラ。

六月十九日⁴⁵

[漢字仮名交じり現代文への転写]

拝啓

お手紙、本日確かに受け取りました。嬉しく、有難く拝見しました。有難うござい
 ます。あなた様からお返事を下さるとは思いませんでした。本当に嬉しいです。七月二日
 に受け取りましたわ。無事でお帰りになられましたとのこと、安心しました。山では
 あなた様がお帰りになられてから、何も変わりありません。今月の五日頃、敷香（しく
 か）へ帰ります。上敷香は、何か変わったニュースがありませんでしょうか。すっかり
 夏になりましたわね。綺麗な花が咲いて、とても美しいわ。そちらも賑やかでしょうね。
 山の人たちもみんな元気で働いて

1/2

おりますわ。熊は段々ひどくなりました。つい二、三日前、家の近所でトナカイの死骸
 を三頭見付けましたわ。とてもひどいの、可哀相ですわ、本当に。あたしが帰りました
 後どうなるでしょうね。この間いなくなったトナカイは半分以上見付けました。まだあ
 と少し見付きりません。一生懸命に捜しております。国の爲ですから踏んばっておりま
 すわ。今度の演習は、いつ頃になりますか。十五日になるような話を聞きましたわ。今
 度も中々忙しいでしょうね。一生懸命にやって下さい、国の爲ですから。今度はどちら
 へ演習に行かれますか。もし山へいらっしゃるようでしたら、テントへも寄って

2/3

⁴⁵ 傍線部分は筆跡が異なるのでちの「加筆」であろう。本文に、返書は「七月二日に受け取
 りました」、「今月の五日頃、敷香（しくか、つまりオタス）へ帰ります」とあるから、この手
 紙が実際に擱筆されたのは1941年7月2～5日の筈、恐らくは、返書を受領した直後の「7月2
 日頃」であろう。

下さいませ。山の人たちはみんな楽しみにしておりますわ。これはつまらないものですが、トナカイの皮で作った財布を送りましたから、お受け取り下さい。お忙しいところへお手紙を差し上げて、お許し下さいませ。では、皆様に宜しく。お体をお大事に。あなた様の御健康と幸福とを神様にお祈りしておりますわ。

では、さようなら。

河野 (この) 廣 様

上野芳子より。

3/4

失礼ですけれども、この手紙がもしそちらへ着きましたら、御返事下さいませ。お願いします。お待ちしております。

河野少尉様へ

さようなら。

六月十九日 ⁴⁵